明 治初期の洋風 (美術と図画 [教育

策と深い関係がある 治 期の洋風美術、 殊に西洋画の盛行は、 政府が採った欧化政

感していたからに他ならない。 化政策であった。それは明治政府を担った人々が、幕末以来の接触 て政府が採用したのが、 を通じ欧米諸国の軍事力を含めた文物・制度の圧倒的な優位性を痛 教育制度等のすべてのモデルを欧米諸国に求め移入しようという欧 裏付けとなる国家体制の整備・近代化を計る手っ取り早い方法とし 等なものに改正することが新政府の最も重要な課題であった。その 制の下、 殖産興業と富国強兵によって欧米列強に伍する力を蓄え、 諸外国との間に結ばざるを得なかった不平等條約を互恵平 産業器機・技術ばかりでなく官制・兵制 幕藩体

る。 では外国語・地理・物理・数学・化学・器械などと並び 画 遠藤辰三 道 立し川上萬之丞(冬崖、一八二七―一八八二)が 画学出役 に 任じら 究・教授されていた。しかも文久二年 た 著書調所 (安政四年授業開始、文久二年洋書調所、 来航という衝撃的な事件に促され外交・軍事上の必要から設置され が設置した蕃書調所においてすでに始められている。ペリー艦隊の 西洋の学問、すなわち洋学の研究は安政三年(一八五六) (三平)・若林鐘五郎らがおり、 当時の画学局には前田又四郎 即·近藤清次郎 (正純)・服部新之丞(杏圃)らが加わる。 のちに舟橋鍬次郎・伊藤陪之助 ・曲淵敬太郎・吉田修輔・宮本正 (一八六二) 同三年開成所と改称 には画学局 一学 K も研 から 幕 独 ñ 府

> 忽チ習學ノ念起シ」て文久二年九月五日画学局に入学した一人であ 画ヲ借覽セシニ悉皆眞ニ逼リタルガ上ニ一ノ趣味アルコトヲ發見シ 《『高橋由 一履歴』)。

る

新後冬崖に師事した小山正太郎が次のように語っている。 賞用作品を創るためでなく、 になるが、冬崖は蘭書を翻訳しつつ手探りで教授したのである。 の内容は製図・図学が主たるもので、 上冬崖と洋風画」『美術研究』七十九号、昭和十三年)。 するという功利的役割をより多く担うものであった(隈元謙次郎 ここでの西洋画学研究は、 他の諸科学と同様、 由一が望むような「一ノ趣味アル」 やがて油画も研究されるよう したがって「画学 外交・国防に寄与 Л 維

つたらしい。」 版の畫を一々面相筆で筋を寫したり油繪を日本の墨で墨隈をと ものがいくつか残つてゐますが、 る様な始末で、其苦心の程は予想の外であつたらしい。 あるから、 べ之を実驗しては又工風をして、一種のものを發明して行かれ を賣ることも出來ないし、 △當時は和蘭の畫を見ることも難いし、筆や繪具や其他の材料 たり、 いろいろ無理なことをして原本に似せやうといふので 時のかゝることゝ骨の折れることは非常なものであ 全く其研究は先生が蘭書によつて調 西洋のものを模寫するにも銅 其時の

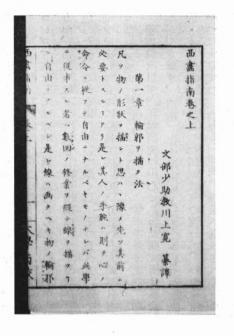
治三十六年五月二十日・六月五日・七月五日・八月五日・八月二十 「先師川上冬崖翁」『美術新報』第二巻第五・六・八・十・十一号、 明

揃 えるよりなかった。画用油は荏油に銀密陀を混ぜ、 画といっても絵具・用具は手に入るべくもなく、 これを日光に すべて手製で

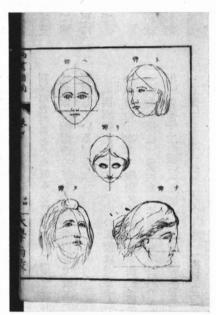
沿期に活躍する高橋由一も

「嘉永年間

或ル友人ヨリ洋製石版









川上寛(冬崖)纂訳『西画指南』前篇(明治4年,大学南校刊)より。

った(『高橋由一履歴』による)。 でで、『高橋由一履歴』による)。 でに、これを裏打ちして厚くし、その上へ強い膠を引き、更に が、あるいはドウサ引きした美濃紙に、まず図取りをし水彩で施 りか、あるいはドウサ引きした美濃紙に、まず図取りをし水彩で施 りか、あるいはドウサ引きした美濃紙に、まず図取りをし水彩で施 のした後、これを裏打ちして厚くし、その上へ強い膠を引き、更に が、あるいはドウサ引きした美濃紙に、まず図取りをし水彩で施 のした後、これを裏打ちして厚くし、その上へ強い膠を引き、更に が、あるいはドウサ引きした美濃紙に、まず図取りをし水彩で施 のした後、これを裏打ちして厚くし、その上へ強い膠を引き、更に が、これを連るのに漆箆や 西洋ナイフを加工したものを使う。 交色板(パレ 数日間さらして精製する。絵具は在来の日本画の顔料を用い、これ

そのどちらにおいても川上冬崖の果たした役割は大きい。一つは大学での「画学」「図画」授業へ継承されていくのである。的・実用的側面に着目した図画教育の流れが、一つは陸軍へ、もう油が引き継ぎ、明治二年大学南校となる。そして西洋画法 の 功利 著書調所以来、洋学研究の中心であった開成所は幕府崩壊後新政

文部省、 なり、 岡藩兵学校、 して招かれ赴くが、 川上冬崖は、 直ちに帰京している。そして同三年七月大学南校図画御用掛と ここで『西画指南』 同八年) 十二月開講、 明治元年(一八六八)沼津につくられた兵学校 と『輿地誌略』の刊行に関わる。 同年十二月十二日付で開成所筆生を申し付けら 明治四年十一月陸軍省直轄となる)へ絵図方と (前篇二冊、 大学南校、 明治四年。 後篇三冊 旧

るもので、 である。 毎條圖ヲ附シ論ヲ與タル畫學書ナリ」 とあるように 行英人ロベルト、 西 [画指南] 挿入図版はほとんど原本のものだが、 The Illustrated Drawing Book. の冬崖による部分編訳 前篇一 は我が国最初の西洋画式による図画教科書と目され スコッ 冊はその凡例に「此書原本ハ千八百五十七年ノ鐫 トボルン氏 ノ著ハセシ訓蒙ノ小冊子ニシテ 若干別の画学教本 Robert Scott

例えば John Gadsby Chapman の The American Drawing Book. 例えば John Gadsby Chapman の The American Drawing Book. 即の可用がある(参照、金子一夫「明治初期の翻訳図画教科書とその所本の研究(1)」『同』第34号 昭和五十六年。同「明治初期図画教科書とそのがある。 ロッカー あいま は原本の銅版画の線を冬崖が面相筆で根気よく写したものを木版では原本の銅版画の線を冬崖が面相筆で根気よく写したものを木版では原本の銅版画の線を冬崖が面相筆で根気よく写したものを木版では原本の銅版画の線を冬崖が面相筆で根気よく写したものを木版では原本の銅版画を表表している。

る。 を正確に表現する技術を会得する実用の学と捉えていたのである。 考えた。 可 テハ畫圖ヲ以テ一科學ニ充ツ」と誌すように、「畫圖」 ス又其精絕微妙ニ至テハ當ニエヲ造化ト爭フヘシ故ニ泰西諸國ニ於 文ノ盡ス能ハサルヲ補ヒ幽徴ヲ に明治四年に出ており、 能な事物の 冬崖は『西画指南』「凡例」で「世ニ畫圖ノ有用飲ヘカラサ 川上寛模画」とある。 第 輿地誌略』 一編三冊が大学南校発行、 つまり は内田正雄訳編の十二巻十三冊にのぼる地理書であ 「幽微」を明確に伝えるに「有用」 「画学」を、洋学の一分野として対象を認識しそれ 七冊とも ・ 晰 ニシ教化ヲ裨ケ功ヲ六籍ト同 第二編四冊が文部省発行として共 挿絵は 木版刷で、 な一科学であると 巻七を除き、 は文では不 ルヤ

なお、大学南校は明治四年七月南校と改称、翌五年八月の学制に

よって 京開成学校、 第一 大学区第一番中学になり、 そして同十年四月に東京大学となる。 同六年四 月開 成 学 校 同 七年

によって区々である。 大学での図画教育 画学」という学科名が用 は はすべて い 西 5 洋 れているが、 画法によるもので、 内容 は設定される科 図 画 な い

間 官 則 で 明 本 がだが 高橋浩 南 邦 普 0 子 校 上 一冬崖に師事した高橋 ま |科課程 画学掛として 通 ŋ 由 画 由 |學教授ノ嚆矢ト云フ| 自身は 週八時 (『東京帝国大学五十年史』上冊、 は 間 南校 月・水は各二時間、 図 0 画 図 阿學掛奉職中 . 画授業を受け持っている。 由 を教えてい が 別治四 (『履歴』) る。 -画學生を教授ス世ノ人之ヲ 年十二月 と自負していた。 火・木・金 昭和七年) Ŧî. 年五 から同五 月改正の を見ると、 授業内容は ・土は各 年十月ま 南校規 教 時 不

年 7 が あるが、 大学での 械 自 幾何学及器械の図」、 る。 計 在法」、 明治七年の東京開成学校予科二年間の 図 これに対して明治八年の物理学教場での 比較的憶測 図 であった。 画 第 および 年 の可能な例を幾つか次に拾い出してみる。 期前半が 第 画学」 年 「模写法」、 の内容を明確に知ることは 器械の 図 後半が 画学」 第 「真写法」とな 画学 年 は 器械描写 は 第 困 年 難

年と第一 に分け、 年 更に明治九年に改正された学科課程では予科の三年間 易 第 模 一年は 量写 期 期ごとのきちんとしたカリ 真写 法、 自 画 在 同年 法 画法」 第 景色及築造物」である。 であるが、 期 円 体及実体写法 内容は第 丰 ユ ラ ム を 次いで第三年第 年 組 実体写 第 んでい 期 を各年 陰法」、 る。 描 画 第 及 期

図

画 一科の

教授掛として近藤正純

横山

松三

郎

河北道

介

榎

本

及器

期 械図製 で は 図演習」 用 器 画 学 で ある。 何図 法及投影 法人、 同 年 第 期 で は 遠

のとは尺度の異なるものであった。 ح 0 ように当 時 0 の一番 法に よる 画 学 とは、 今 日 考えら れ る

年に まで neau(明治七年来日、 等出仕を申し付けられた彼は、 となり、 れている 方向づ 再び冬崖に戻れば、 編纂したといわれる 士官学校及び幼年学校の図画教官を務 けを行う。 ここでフ (村居銕次郎編 ラ やや後のものだが、 ンス人図学教師アベ 同十三年離日)と共に 明 『洋画先覚本多錦吉郎』 治五年 『画学教程』 同七年三月 (一八七二) には次のような項目が掲げ 明治十六年より ル 陸軍 陸軍士 めた本多錦吉郎が二十 + 七十一 ゲ 户 での IJ 官学校図画教授 陸 頁 図学·画学授 1 軍省兵 Abel Guéri-昭和九年)。 何三十 学 寮 应 八

0

畫學 圕 學方 方 面 標高幾 透視圖 水彩畫 鉛筆 面 畫 平 何 品 | 平面上に物體を寫影し、平面上に物體を寫影し、

契約を結 IJ =1 んで I の位の右 は 中間に一個方面 民 1, る。 間 人であるが、 ゲ **追彩圖** / 追描 IJ 一滃圖 1 昌 は 水彩 図学教師として日 \計圖等の着色研究の資に供するもの/ 注として、地形圖又は築城、兵器設 画と建築学をよく 1本政 į 府が 直 士官学校 接 雇 IE. 傭

年)などがある。 年)などがある。 年)などがある。 年本画の習画帳である『写景法範』(陸軍文庫、明治七別製作の指導書『地図彩式』(陸軍文庫、明治六年)、我が国で最初の図製作の指導書『地図彩式』(陸軍文庫、明治六年)、我が国で最初の選集の陸軍での仕事としてはほかに、フランス人工兵大尉ジュル

おいての「図画」はどのようなものであったのだろうか。以上、大学および陸軍での図画教育を瞥見したが、一般の学校に

れ、ここでも西洋式の図画が導入されるのである。 範学校・各種の職業学校に至るまで「図画」が教科として 設 定 さ明治五年 (一八七二) 八月の学制制定以後、小学・中学・大学・師

区に分け、区ごとに小学校一つを置くというものであった。に分け、一区ごとに一つの中学を置く、更に一中学区を二一〇小学分け、一大学区に一つの大学を置き、また一大学区を三二の中学区「学制」そのものもフランスに做ったもので、全国を八大学区に

たとえば、小学校は上下二等に分けられ、上等小学に「画学」が開出さる方法で、対象の輪郭を正確に写す訓練になると考え「野画」は、方眼紙または罫を引いた紙の上に、描くべき対象の形体に対応する点を罫線を利用して打ち、その点をつないで対象を平体に対応する点を罫線を利用して打ち、その点をつないで対象を形体に対応する点を罫線を利用して打ち、その点をつないで対象を平体に対応する点を罫線を利用して打ち、その点をつないで対象を形に対応する方法で、対象の輪郭を正確に写す訓練になると考えられていた。

学」が「罫画」に変わりその内容を「南校板罫画本ヲ用ヰテ点線正明治六年五月改正の「小学教則」によれば、 上等小 学 で は「画

の本を指しているのか。形ノ類ヲ学ハシムル事」と指示している。「南校板罫画本」とはど

式』(玉山登、明治六年二月)などが知られる。 電力 では、前出の『西画指南』(前篇二冊、大学南校、明治四年初秋)、 電学書』(文部省編纂・文書局発行、明治六年五月序)、山岡成章『小学書には、前出の『西画指南』(前篇二冊、大学南校、明治四年初秋)、 電学書』(文部省編纂・文書局発行、明治五年五月序)、山岡成章『小学書には、前出の『西画指南』(前篇二冊、大学南校、明治四年初秋)、 電学書には、前出の『本書記録』(玉山登、明治六年二月)などが知られる。

えられるが、これを「罫画本」といってよいかどうか。 このうち「南校板」には冬崖の『西画指南』も該当するものと考

山岡成章の『小学画学書』(木版刷一冊本、三十一丁、一二四図)も当時かなり流布したものである。全体を第一号では野画の方法で直線→曲線→図形へ、第二号では物品の図形、建物の扉などを題材に線の太さで陰影を表現する訓練、第三号形、建物の扉などを題材に線の太さで陰影を表現する訓練、第三号形、建物の全体を線により陰影描写する勉強、という構成になっていは建物の全体を線により陰影描写する勉強、という構成になっています。

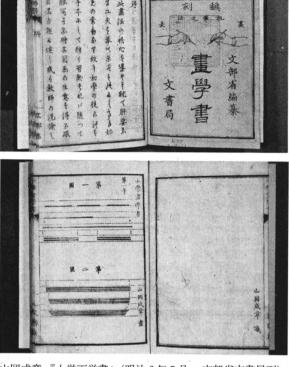
ると、山岡自身が西洋画法を十分理解していたとは思えない。(金子一夫、前掲論文参照)。 山岡が 原図を筆で写したものを木版に移図版はいろいろな外国の教本から拾い集めて編集したものらしい図版はいろいろな外国の教本から拾い集めて編集したものらしい

また、使用する鉛筆やチョーク(コンテ)にしても 当時 はきわめれる図画授業に問に合わせるべく急ぎつくらせたものであろう。いずれにせよ、これら図画教科書は学制公布により学校に設定さ

て入手が困難であった。 よう」『三彩』第三〇七号、 小学生に及ぶのは二十年ごろ以後である(青木茂「ふたりせいし 昭和五十六年三月号、 鉛筆が普及するのは明治十二、 参照)。 三年 で あ

部紀要』第32号 以後になる(金子一夫「明治期師範学校図画教員の研究』『茨城大学教育学 範学校ですら図画を教授し得る専門の教員がやや揃うのは明治十年 その上、図画を教授できる教師もいなかった。教師を養成する師 昭和五十八年)。

普通図画教育がまがりなりにも成立するのは明治十三、 育なるものはほとんど実体のないものであったといえる。いわゆる したがって、 学制公布後暫くは、 小学校、 中学校における図画教 四年以降の



刻

文部省編

山岡成章『小学画学書』 (明治6年5月, 文部省文書局刊) より。

ことであろう。

の渇望を満たす上で私的美術教育機関である画塾が大きな役割を果 うに「真ニ逼リタルガ上ニーノ趣味アル」ものとして西洋画を発見 たした。 ところで、 自らその習学を志した人々も少なくなかった。 世の欧化熱に煽られてにしろ、 あるいは高橋由 そらいった人々 のよ

国沢新九郎の彰技堂などが名高い。 った洋画塾としては、川上冬崖の聴香読画館、 工部美術学校が開校する明治九年 (一八七六)以前に東京周辺にあ 八四)、 二七―一八九二)、 下谷池之端の横山松三郎(一八三八―一八 レイテッド・ロンドン・ニューズ』通信員として横浜に住 の家塾などもある。 塾とはいえないが、『イラスト ほかに横浜の五姓田芳柳(一八 高橋由一の天絵社、

開かれた。ここには小山正太郎、 よれば当時の聴香読画館は次のようなものであった。 藤真楯、 ら日本人に西洋画を教えていた。 んだチャールズ・ワーグマン (一八三二―一八九一)も早くか 上冬崖の聴香読画館は明治二年、 松井昇、 望月俊稜らが学ぶ。小山正太郎の回想に 松岡寿、 下谷和泉橋通徒町に 中丸精十郎、 印

が洋画、 評で、 冬崖が洋画研究のかたわら息抜きに描いた南画が時勢柄好 から洋画に転じた人、 塾生には十二、三歳の初学者もあれば四十近い日本画家 わざわざ南画を習う人も来る始末、 折衷画が二分、 また開成所の生徒だった人もいる。 南画が二分という割であった。 門人のうち六分 13 第1節

育てた。 で急逝する。 国沢歿後の彰技堂は本多錦吉郎が継 承、 多くの後進を

時は洋画を研究しようにも材料を得ることができない。 手本と云えば内田正雄がオランダから将来した油絵が唯 を模写する。 < から 如きものはない。洋紙も手紙用の罫紙ばかりで、 あっても同じ手紙用の六、 った(「先師川上冬崖翁」参照)。 やむを得ず美濃紙の礬水引に日本の筆墨を以て鉛筆画の手本 また油絵は絵具もカンヴァスも自ら製造して描いた。 七寸四方の極薄のもので鉛筆がつきに たまたま白い洋紙 鉛筆も今の 一のもので

及拡張に尽力した。 郎 城亀松、 端玉章、 であり、 日曜日に教員、 府認可の天絵学舎となる。 場天絵楼にはじまる。 高橋由一の天絵社は、 殿木春吉などが名を連ねる。 荒木寛畝、 多くの門人が集ったが、 山田成章、 塾生の作品を公開する展覧会を催すなど、 岡本春輝、 遠藤詮四郎 同八年に天絵社と改称、 明治六年六月日本橋浜町に創設され 天絵社は当時の東京で最も名高い洋 伊沢九阜、 明治九年ごろまでの入門者には川 由 細田季治、 は明治九年五月から毎月第 内田誠、 金沢正次、 同十二年六月に東京 安藤忠太郎、 洋画の普 横井綱五 た画学 彭

敬、 ど洋画の普及に努めたが、 覧会を開く一方、 年新橋竹川町に分舎を設け、 本 塾であり、 彰技堂を開設した。 明治七年七月、 諫山麗吉、 画材等が話題となった。 国沢が英国から携えてきた洋画技法書、 菊池鋳太郎、 英国留学から帰った国沢新九郎は麴町隼 麹町の彰技堂でも自作と塾生の作品を公開するな 西欧で正則の洋画を学んだ人が開く最初の洋 明治十年(一八七七)三月、 当時の西洋画家たちの作品を集め 田崎延次郎らが師事する。 本多錦吉郎、 浅井忠、 参考書、 三○歳の若さ 守住勇魚、 国沢は翌八 町 美術標 K 画 西 画 塾

> 五姓田 い 次 0 る。 許では山本芳翠、 一郎の家塾では亀井至一、 その他 松原三五郎らがそれぞれ習学した。また横浜のワー |義松、 の画塾でも多くの青年たちが西洋画を学んでい 高橋由 五姓田義松、 狩野友信が師事し、 村井羆之輔、 渡辺文三郎、 本多忠保らが、 油画と水彩画を学んで 渡辺幽香、 グマ Ŧi. る。 姓 平木政 ンには 田芳柳 横山

ない。 格的な西 L かし、 洋 これら画塾での西洋画習学は未だ変則のものであり、 画 [の教育は明治九年の工部美術学校開校をまたねばなら 本

る。 が創設されたことは、 産興業を推し進める上で中軸となる工部省に最初の官立の美術学校 寮に美術学校が置かれるのは明治九年(一八七六)のことである。 切の事務を総管する機構として創置(明治三年)された工部省の 鉱 Щ 製鉄・燈台・鉄道・土木・造船・電信等の工業に関する 当時の美術がもつ性格・位置を象徴して 工 殖

する) 工部省沿革報告』 の 「工部大学校 (大蔵省編・刊、 明治九年の条に次のような記事が見える。 明治二十一年。 以下『沿革報告』と

傭 彫刻ノ二科 テ教師 月六日工部美術學校ヲ創設シ本校ニ屬ス。 ト爲シ、 (以テ各種ノ物形ヲ模造スル等ノ諸術ヲ教ユ) ト(畫學ハ畫法及ヒ油畫ヲ教ヘ彫刻學ハ石膏ヲ) ト 其校則ヲ選定シ之ヲ頒布ス。 シ、 伊 其學科ハ畫學 人三名ヲ徴

tonio Fontanesie (一八一八一一八八二)、 学校が誕生、 pelletti(?—一八八七?)ら三人の教師が来日することになる。 ラグーザ Vincenzo Raguza (一八四一—一九二七)、 ンニ・ヴィンツェンツォ・カペレッティ Giovanni Vincenzo Cap-こうして我が国最初の西洋式の画学と彫刻学を本格的に教授する その教師として画家アントニオ・フォンタネージ An 彫刻家ヴィンツェンツォ 建築家ジョヴァ

中しており、 概説』昭和四十三年、鹿島研究所出版会) わっていたが、そのほとんどは英国人である。 、の外国人雇入総数五○三名、その半数近い二二八名が工部省に集 当時、 工部省にもすでに数百人の外国人専門家が雇われ運営に携 うち一八五名が英国人であった (梅渓昇 明治七年の政府機関 『お雇外国人①

ほか ある工学寮に、 六〇円)を筆頭にすべて 英国人であった。 Henry Dyer(明治六年六月三日から同十五年六月一日まで在職。 月給六 月給三〇〇円)がフランス人として唯一かつ短期間在籍しただけで、 Boinville 特に人材養成のための工学寮には、 conte Allessandro の工部卿伊藤博文への熱心な勧告があった結果であるといわれ は これには当時の駐日イタリア全権公使アレッサンドロ・フェ 都検 (明治五年十一月十六日結約。同七年一月十二日本省に転ずる) (教頭) イタリア人教師による美術学校がつくられたわけで 兼土木及び 機械学教師 Fe (明治三年来任。 建築の いわば英国人の支配下に 一時帰国。 のヘンリー・ダイヤー ボァンヴィル 同七年十月再来 0 de

明治九年夏、 三人のイタリア教師は来日、 直ちに工部省に届け出 る

任 伯

> 町一番地の工部省構内の官舎に住むことになった。 年、 小山町二六番地の官舎に隣合で居を構え、 て八月二十九日付で契約は 発効する。 月給二七七円七五銭であった。 ラグーザとカペレ それぞれ 期間は 向こう三カ フォンタネー ッティは三田 ジは溜池

タネージに就て」『美術研究』九十四号、 と予科教室に は 別棟が 充てられた 臨本模写室、 建てで、フォンタネージは天井や窓に採光のための改造を加えた。 校舎には工学寮構内の古い数棟が充てられた。 揮の下で大学本館(建坪六九六坪)が竣工間近であった。美術学校の 場として明治六年十二月、 の新築が決まり、フォンタネージ着任のころには、 舎が使われていた。だがこれが手狭になったため、七年二月大学校 工学寮の庁舎は虎ノ門内の旧延岡藩邸跡にあり、 石膏模写室、 モデル室も設けられた。 造家棟梁アンダーソンが建てた小学校校 (隅元謙次郎「アントニオ・フォ 昭和十四年、 画学教室は木造二階 参照)。 また、 ボァンヴィル 大学専門科の 彫刻教室 教

てみる。 術学校』近代の美術第46号に採録。 の資料「工部省 美術 至全十五年」(青木茂編『フォンタネージと工部美自明治九年」(青木茂編『フォンタネージと工部美 至文堂、昭和五十三年)により概観

で学校規則の概略を記している。 移シ百工ノ補助ト為サント欲ス」と学校設立の理由を述べ、 この文書は冒頭に「本校ハ歐州近世ノ技術ヲ以テ我国旧來 次

力の進歩の状態によって本入学の当否を決める って選び入校させる ○十五歳以上三十歳以下の性質善良、身体壮健なものを試験によ 工部美術学校での教育の変遷を国立公文書館蔵の『大政紀要』 ○初めの六ヵ月間は仮入学で、 ○教場を 六カ月後、 「既ニ稍 職風 中 15

ヲ教ユ」ることになる。 ○学課を油画と彫刻の二種に分け、 ○学課を油画と彫刻の二種に分け、 ○学課を油画と彫刻の二種に分け、 ○学課を油画と彫刻の二種に分け、 「遠近法、風景油画、人物油画等」の画学を教
「東京の第一区と、「論理実地新ニ修業ヲ望ム者」を対象とする就学
我国ノ技術ニ得ル所アリ専ラ実地修業ヲ望ム者」を対象とする就学
我国ノ技術ニ得ル所アリ専ラ実地修業ヲ望ム者」を対象とする就学

いた。 新吉郎らが入学している。 敬二郎らが、また五姓田芳柳門下の山本芳翠、 金沢正次・遠藤詮四郎ら、 には当時東京周辺の画塾で西洋画を学んでいた青年たちが含まれて 二十一日入学が許可された。 敬蔵らがいる。 一月十三日、 画塾から入学した者に、 ・松岡寿・望月俊稜・浦井韶三郎ら、 ほかに藤雅三・日下部美代二・岡見千吉郎 画学・彫刻学の試験が実施され、 彰技堂の浅井忠・西敬・広津正人・市川 画学には数十名の応募者があり、 聴香読画館の小山正太郎・千葉 横山松三郎門下の疋 天絵社の彭城貞徳 合格者には同月 · /// 印

埼尚文編「工部美術学校画学生徒在籍年表」『明治の宮廷画家―五姓田義松』 として活躍する神中糸子は ては当時の工作局長大鳥圭介の娘雛子を初め、 テトス又教場ヲ分チ男女相往來スルヲ禁ス」との た。五姓田義松・高橋源吉・中丸精十郎・守住勇魚・殿木春吉・宮 間 十二月十四日、 ノ通學ヲ許ス二十名ヲ限リ入學セシム但女子十歳以上廿五歳マ 得能通要·大山助 川路はな子・それに須川蝶が入学した。のちに女流画家 学校規則中に 明治 一らは週三回出席生である。 「男女共毎周間月水金ノ三日午后半 + 一年四月の 入校である 山下りん・秋保園 条項が 女生徒とし 加えられ 尾

展図録所載、神奈川県立博物館、昭和六十一年)。

僅 十名を募集することが認められた。 の間官費支給生として毎月二円の月謝を免除して奨励すること、 シ」(『沿革報告』)という情況であった。 貴重セラル、彫刻學ノ如キモ亦其世ニ裨益アルコトヲ了知スル者 之ヲ學ヒ以テ身ヲ立テ名ヲ顯スノ技藝ト爲スモノナク、 本邦ノ彫鏤師ト稱スルモノハ楖ネ傭職ノ賤業ニ屬シ絶テ上流人士 とても自費修学の意志などないように見えた。 か数名現われたが、 方、 彫刻学は惨澹たるものであった。 これらの輩はただ様子を窺いにきただけで、 そこで彫刻学生徒には当分 試験当日、 まさにそれは 職工体の者が 歐州ニ在 「抑モ 四

名、合計二十九名。つまり総計六十八名である。名、合計三十名。彫刻学は毎日出席生二十六名、一週三回出席生三在、画学で毎日出席生徒二十六名、一週三回出席生七名、女生徒六祖学で毎日出席生徒二十六名、一週三回出席生七名、女生徒六祖学での学生数を正確に把握できないが、明治十年三月三十日現

し工部大学校となった。 十年一月十一日、工部省内の諸寮が廃され、工学寮も工作局に属

が、 線畫 ~ センクション、 彫刻学教室という専門の二課の前段階として「ヲルソゴイル、 室 水並禽獣真寫法 V 同年六月三日、 「草花ノ彫刻 彫刻学はラグーザが教える。そのほか、 ティが担当することになる。 粉飾」 等の基礎的課程である エンド、 草花動物ヲ形容擬寫スル法」 を 習学 する 画学教 校則が改正され、 造家ニ用ユル動物彫刻 プロスペクチーブ 画学は従来通りフォンタネージ 「予科」 学課が三つに分けられた。 一が設けられ、 (正射法と遠近法)幾何 肖像彫刻」 女子の入学年齢はこれ を習学する これをカ プ 山

改められた。 まで「十歳以上廿五歳マデ」であったが「十歳以上二十歳以下」に

cenzo Cappelietie∥と見える。 くの場合 ブジャン・ビンセンソ・カッペ [ピ] レッチー Jean Vin-営繕局に転ずる。 参謀本部 カペレッティは美術学校在任中、 (同) の設計を担当、 なお工部省関係諸記録にはカペレッティの名は多 十二年八月二十八日契約満期の後、 旧遊就館 (明治十四年竣工)、 旧

ほか芸用解剖学・遠近法等の書籍、 リアはもちろん、フランス、オランダなどの古今の有名画家の作品 (一八七六)十一月二十一日から始められた。彼は来日に際し、イタ 布、 禄造編 。写真・石版画・銅版画、ギリシャ、 アントニオ・フォンタネージ による 画学教室の 授業は 明治九年 画用紙、 『松岡寿先生』、昭和十六年、 木炭に至るあらゆる教材を携えて来たのである(安 参照)。 衣裳写生用の機械人形、 ローマの彫刻の石膏像、その

ども」、不同舎旧友会編『小山正太郎先生』所収、昭和九年)。フォンタネ していたようである パの美術学校での伝統的な方法を真正面から生徒に伝えようと意図 り新築する積りで其設計図もあり、 術学校を設立しようといふ意図であったから、校舎の如きも理想通 大図まで自ら作ってゐた」ほどであった ジは工部省での教育という枠組にとらわれることなく、 画学教室の生徒のひとりであった松岡が回想するようにフォンタ ジのこの美術学校にかける抱負は並々ならぬもので「完全な美 その美術学校に描くべき壁画 (松岡寿「小山正太郎君の事 1 ロッ

事務的才能に長け、 早くから工学寮の助手を勤めた小山正太郎が

> 十五号所収。青木茂編『フォンタネージと工部美術学校』) 残した「工部美術學校画學生徒改級表 音明治九年十一月」は画学教室で (参照、 タネージが 行った 実技授業のおおよそを 窺い 知ることができる |課題と生徒の学習の進捗状況を記録していて、これによってフォ 陰里鉄郎「フォンタネージと日本の弟子たち」『日伊文化研究』

0

た。 る。 ら油画風景写生へと至るコースである。このようにフォンタネージ る。 は学校近くの町家の娘を頼み、 の授業はきめ細かい周到なカリキュラムに則ってなされたようであ 筆(コンテ)による人物写生へと進み、そのあとで鉛筆風景写生か 画手本模写・実物写生》、それから人物手足写生 の素描などの模写)に始まり、石膏人物(半身→立像)写生 年七月の四時期において 生徒が 取り 組んでいる 課題が記されてい 実物写生)、次に油画による人物写生または草花写生、 これにより授業課程を推定すれば、まず臨画 モデルを使った人体写生も行っているが、モデルを得るのは難 画学生徒改級表」には明治十年四月、同七月、同十二月、 男性モデルには工部省の常傭人夫などを使い、女のモデルに 着衣で写生するのがせいぜいであ (石版画手本模写 (フォンタネージ 更に黒灰 (石版

を初めて見た時には あるが、生徒がこれを十分理解し習得したとはいい難い。 まりできるだけ白を混ぜない透明顔料で仕上げていく伝統的方法で すなわちテンペラで厚盛りの下塗りをし、その上をグレーズ法、 天絵社で油画を習っていた安藤仲太郎は、 フォンタネージの油画技法は、 「実にメチャーへのキタナイ絵」だと思ったと 唐の土を酢と鶏卵で溶いたもの、 フォンタネー 高橋由 ・ジの油

明治三十三年三月)。 語っている(安藤仲太郎

展図録所収。 ントニオ・フォンタネージ」『フォンタネージ、ラグーザと明治前期の美術 月十五日付書簡の中で次のように書いた(アンジェロ・ドラゴーネ「ア しい生徒たちにとっては、 あればあるほど、 細部にわたる講義を行った。そのフランス語による講義が本格的で 基礎的理論、 フォンタネージはまた、実技授業と並行して遠近法など西洋画 イ なかなか理解が困難であったに違いない。フォンタネージ自 タリアの弟子カルロ・ストラッタ宛一八七七年(明治十年) 六 東京国立近代美術館、 絵具や木炭の使用法、 基礎的知識が皆無か、あるいはあったにしても乏 竹村本五郎の通訳によって聞くことでも 昭和五十二年)。 油絵下地の製作法など、 技法の 0

法規、 たり等々…… ょくちょく誤りを犯す。 のだ! と立体幾何学、 に出て40人程の学生たちに向かった。私は彼らに、 らんざりさせられることがらに追われて過ごし、 この国で身を立てるための煩労にとりかかった。言葉、 少しく健康を害していて、ありきたりの見物をすませてから、 東京 学生、すべて未知のもので、初めの幾月かは、こうした (または江戸)には去年の九月の初めに着いたのだが、 講義の通訳はかろうじてフランス語を話す程度で、 素描と人物画、 例えば、等しい、を類似する、と訳し それに風景画を教えねばならぬ それから学校 平面幾何学 慣習、

> 程で彼は学校を辞めることになり、 いたばかりの明治十一年(一八七八)九月三十日、思いもかけない過 ネージと伊太利亜との想ひ出」『日伊文化研究』 第六号、昭和十六年五月)。 ったから生徒は悉く敬慕してゐた」と書いている(松岡寿「フォンタ したのであった。それに彼はその人格が高潔で、 常に話して聞かされるので生徒は毎日の授業を非常に楽しんで登校 法に至るまであらゆる方面に亘り教授し、 松岡寿は「その教授振りは一般画論より人物画法、 たちの心をつかむのに成功、 とも ところが、彼が日本で果たそうとした美術教育の構想が端緒に かかわらず、フォンタネージは真剣な指導ぶりによって生徒 非常な尊敬をかちとることができた。 イタリアへ帰ってしまうのであ 又古代名家の逸話なども 我武士的な所があ 風景画法、 0 18

たのが大きな理由でもあった。 政事情が急激に悪くなり、その実現が不可能になったことに落胆し で用意していたにもかかわらず、 もよるが、 日 本の風土病である脚気にかかり病状が思わしくなかったことに 理想的な美術学校をつくるために設計図や壁紙用下図 明治十年の西南戦役後は政府の財

る。

カッタからやってきたこの教師は、生徒たちを甘くみたのか、 三十一日解約。月給二七七円七七銭)が画学教師の椅子についた。 国家的事業の中軸をなしてきた工部省事業そのものの破綻は政府に さて、 レッ つの政策転換を迫らざるを得ない情勢ともなっていたのである。 西南戦役勃発による巨額の戦費捻出の必要と合わせ、 チ フォンタネージが辞任したあとを受けて、 Prosperro Ferretti (明治十一年十月一日結約、 プロスペロ・フ 同十三年一月 殖産興業の 小カ カル

描いて見せ、たちまち顰蹙を買ってしまった。塗り分け、その中央に軍艦旗のような子供の絵によくある日の出をンヴァスの画面を空と水のつもりか油絵具で青と緑の単純な二色に

ったが、不首尾に終ったため、連袂退校してしまう。術・品性ともに下劣なこの教師を交替させようと学校当局にかけあ画学科の生徒たちは前任のフォンタネージとあまりに も 違 う 技

代を越えて我が国洋風美術家の最初の団体である明治美術会へと流 吉郎、 なメンバーであり、 れる地下水脈を形づくっていくのである。 たちを中心につくられたこの会が、やがて迎える洋風美術の冬の時 う共同研究所をつくり勉強をつづけることになる。 小山正太郎、 松井昇、 大河内信矼なども参加した。フォンタネージの弟子 印藤真楯、 彼らは神田今川小路に家を借りて十一字会とい 松岡寿、浅井忠、 西敬、 これには本多錦 高橋源吉らが 主

回内国勧業博覧会に生徒の作品と共に自作を出品、 時代、 辞任、 は特筆されてよい。 画学彫刻に必要な骨論筋論を中心とした解剖学講義が行われたこと 月十二日付で就任し、 ったサン・ジョヴァンニは擦筆画の手法を熱心に教えたこと、 ひと役買っている 生徒たちの不評をかったフェレッチも明治十三年一月三十日付で 明治十 新たにサン・ジョヴァンニ Acchile San Giovanni が同年! 四年一月に東京大学医学部から玉越興平が招聘され、 また彼は明治十四年三月、上野で開かれた第二 画学教室の指導にあたる。 人物画の得意であ 西洋美術の啓蒙 彼の

に押されてか、当局者の方針はにわかに一転、洋風絵画の発展を抑しかし、時代は漸く国粋保存、伝統回帰への風潮が高まり、それ

あった。『沿革報告』には次のようにある。 学校は閉鎖され、翌十六年一月二十三日をもって廃校となったので会でも洋風画が除外されるという大勢の中で十五年十二月工部美術否されるという事態に立ち至る。更に十七年の第二回内国絵画共進主催で開かれた第一回内国絵画共進会には、洋風画の出品が一切拒圧、妨害するまでになる。そんな流れの中で十五年十月に農商務省

明治十六年一月廿三日、美術學校ヲ廢シ、畫學生徒十五名ニ明治十六年一月廿三日、美術學校ヲ廢シ、畫學生徒十五名ニ明治十六年一月廿三日、美術學校ヲ廢シ、、畫學生徒十五名ニ明治十六年一月廿三日、美術學校ヲ廢シ、

明治初期の美術行政

治初期に政府がとった美術に関する政策の第一は工部美術学校

明